

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 15 日現在

機関番号：17301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23531211

研究課題名(和文) 読書指導カリキュラム構築の基礎研究 大村はまの読書生活指導の系統性を中心に

研究課題名(英文) A Study on Building a Reading Instruction Curriculum: The Omura Hama System of Reading Lifestyle Instruction

研究代表者

平瀬 正賢 (HIRASE, Masatake)

長崎大学・教育学部・准教授

研究者番号：00452855

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究においては、大村はまの行った「読書の方法や技術の習得」をねらった学習指導を対象に、文献や鳴門教育大学附属図書館に所蔵されている学習者の「国語学習記録」をもとに考察を行った。1957～1959年度、1960～1962年度には、すでに基本 練習 応用 の段階をふんだ指導が見てとれた。1966～1968年度、1969～1971年度には、読書指導の指導事項を解明するために、毎月2、3時間程度の学習が新たに実践されていた。この内容は中学校3年間を見通した読書生活指導の「計画案」につながったとみられる。

研究成果の概要(英文)：Based on the literature and Japanese study notes of students from the Naruto University of Education Library, this study explored Omura Hama's educational instruction that aims to acquire reading methods and techniques. From 1957 to 1959 and from 1960 to 1962, instruction was based on the stages of "foundation," "practice," and "application." From 1966 to 1968 and from 1969 to 1971, to clarify items for reading instruction, a new method of imparting education was implemented for approximately two or three hours every month. Presumably, this established the blueprint for reading lifestyle instruction throughout the three years of junior high school.

研究分野：国語教育学

キーワード：大村はま 読書指導 情報活用能力 カリキュラム

1. 研究開始当初の背景

中教審答申の〔改善の具体的事項〕の中で「読書の指導については、自分の読書生活を振り返り、日常的な読書をより豊かなものにするや図書・資料の検索に図書館や情報機器を効果的に利用することなどを内容に位置付ける」ことが示されたことを受けて、新学習指導要領においても「読書に親しみ、ものの見方、感じ方、考え方を広げたり深めたりするため、読書活動を内容に位置付ける」との記載が明確になされた。中学校3年間を通して、「目的に応じて本や文章を選んで読んだり、それらを活用して自分の考えを記述したりすること」が段階的に目指されることになったのである。

そこで、21世紀の今なお現場の国語教室に多くの示唆を与えている国語教師・大村はまの行った読書生活指導に焦点をあてて考察することとする。大村の読書生活指導は、生涯学習の視点から読書人の育成を目指したものであり、生涯にわたってことばと関わり、生活をゆたかなものにしていくことのできる言語生活者の育成を考えると、欠くことのできないものといえよう。

2. 研究の目的

研究全体の目的は、新学習指導要領においても注目されている読書指導カリキュラムを構築することにある。そこで、本研究においては、単元的展開によるさまざまな学習指導法を開拓してきた国語教師・大村はまの読書生活指導に焦点をあてて、情報活用能力の育成とも深く関わる「読書の方法や技術の習得」をねらった学習指導が、1年間及び3年間という枠組みのなかで、どのように行われたのか、また、そこに見られる指導の原理と方法（基本 練習 応用 の段階をふんだ指導）がいつ頃から大村の指導に見られるようになったのかという点を究明したい。

3. 研究の方法

戦後の新制中学校において大村はまが展開した読書生活指導のうち、「読書の方法や技術の習得」をねらった学習指導に焦点を絞り、3年間持ち上がりで指導した年度における指導の内実を明らかにした上で、基本、練習、応用の原理と方法がいつ頃から大村の指導に見られるようになったか明らかにする。

対象とする年度は、1969から1971年度、1966から1968年度、1960から1962年度、1957から1959年度である。当時の大村の学習指導をうかがう資料としては、大村の講演記録、実践記録等が収録された『大村はま国語教室全16巻』（筑摩書房）とともに、鳴門教育大学附属図書館に所蔵されている、大村が指導した当時の学習者の「国語学習記録」（約2,000冊）があげられる。

4. 研究成果

(1) 考察対象年度の位置付け

1947（昭和22）年5月に戦後の新制中学校に身を転じ、1980（昭和55）年3月に退職する大村は、次の通り、中1～中3の持ち上がりを5回経験している。

1957（昭和32）～1959（昭和34）年度

1960（昭和35）～1962（昭和37）年度

1966（昭和41）～1968（昭和43）年度

1969（昭和44）～1971（昭和46）年度

1972（昭和47）～1974（昭和49）年度

このうち、1957～1959年度、1960～1962年度は、西尾実編『国語』（筑摩書房）を用いて、教科書教材を経験単元の向きになるように扱った時期であった。また、1966～1968年度、1969～1971年度は、情報化時代を生き抜く読み手の育成に目を配り、これまでの学習指導をふまえて、毎月2～3時間程度、読書に関する取り立て指導（＝帯単元「読書」）が新たに行われた時期であった。読書生活指導で必要とされる指導事項が、このなかで明らかにされていったととらえることができる。

以下、3年間の持ち上がりとしては最も早い1957～1959年度、とりわけ第1学年の学習指導（1957年度）に着目して、基本、練習、応用の原理と方法について、また、1966～1968年度及び1969～1971年度に行われた帯単元「読書」の目標と内容、中学校3年間を見通した読書指導の「計画案」について述べたい。

(2) 1957年度における学習指導の原理と方法

1957年度学習指導の展開

第1学年各学期の主な学習指導内容をあげると、次のようになる。（各項目は、複数の学習者の「国語学習記録」による。また、教科書教材には「」を付した。）

〔1学期〕

自己紹介

ノートに書く

「一日のはじめに」

「ひとりの新入生」

「イランカラブテ」

ことばの意味と使い方

「あいさつ」

ノートをとじる

ノートについて

「話し合いの学習」

問答

話し合いの問題

国語ノートを見合う

夏休みの仕事

〔2学期〕

第二学期の予定について

ノート調べ

練習（硬筆）

作文の題材集め

字を美しくおもしろく書いてみよう

ノートのまとめと提出
民話を読む
もっと本を読もう
「人にはどれだけの土地がいるか」
「少年駅伝夫」
「大うずまき」
「読書と辞典」

〔三学期〕

今学期の予定
すぐれた読書会 蘭学事始
「夜の太陽」
「ジャン＝クリストフ」
「短歌と俳句」
作文

年間を通して、教科書教材をベースにしなが
ら、学習が生活と切り結ばれるよう、教材
を経験単元の向きに扱って展開されている
ことがうかがえる。1学期は「ノート」(＝「国
語学習記録」)の書き方をはじめとして、聞
く・話す、読む、書く、すべての領域にわた
って、国語の学習を進めていくために必要と
される基礎的な技能・態度を養う学習指導が
展開されている。2学期は、硬筆や作文の題
材集めに加えて、文学的文章を対象にして、
プリントや辞書を使ったり、気のついたこと
を書きとめながら読ませたり、さらには二つ
の作品の副題を考えたりと、いろいろな読み
方をさせている。3学期は同じく文学的文章
を対象にして、自分たちの作った問題をもと
にした課題学習が展開され、話し合いによっ
て読み深めが行われている。

「国語学習記録」に見られる学習指導の
原理と方法

「国語学習記録」(＝「ノート」)は、学習
者自らが毎時間の自身の学びを記し、その軌
跡を振り返ることができるようにしたもの
である。学習者は、毎時間の学習の記録とと
もに、授業で配布された「学習のてびき」を
はじめとしたプリント類をすべて綴じ込み、
「目次」や「あとがき」をつけて一冊の本に
仕上げていく。

大村は、戦前の諏訪高等女学校時代から
「国語学習記録」について、実践的に追究し
てきており、その第一のねらいは、「書くこ
との基本的な力を養うこと(中略)そしてそ
れは、書くことの基本だけでなく、国語学習
の基本に通じる」(『大村はま国語教室第12
巻』筑摩書房)ことであった。「国語学習記
録」の作成を通して、「読書の方法や技術」
に必要とされる資料整理力の基礎が養われ
ていったととらえることができる。

1957年度は各学期に2冊ずつ「国語学習記
録」が作成されており、次のように 基本
練習 応用 の段階をふんだ学習指導が
展開されたとみることができる。

基本

年度当初に記録のとり方についての指導
を行い、毎時間のはじめに意識付けを行うと

ともに、第1単元の終わり(5月)には、「1.
表紙、見返し、とびら、目次、奥付」「2.目
次の作り方」「3.あとがき」「4.きのうの研究」
「5.ノート調べの点」「6.その他の工夫」「7.
作文の題材」といった七つの観点から、記録
を整理・編集して提出させている。

練習

基本 で学んだことが概念的な理解にと
どまらないよう、毎時間の記録をとるなかで
練習 させる。2学期中頃までは、授業の
なかで、適宜、「ノート調べ」を行うととも
に、提出前に「ノートのまとめ」を行う時間
を設けている。

応用

これまでに学習したことが生きて働くも
のとなるよう、毎時間の記録とともに、家庭
学習のなかで記録の整理・編集を行わせて、
応用 させている。

大村は、3月に提出されたある学習者の「国
語学習記録」に、「深さが加わって、すばら
しいノート。あなたは、一年を通じ、最もす
ぐれたノートでわたくしを喜ばせてくださ
ったひとりです。」とコメントを寄せている。

以上のように、中1～中3の持ち上り
の年度としては最も古い1957年度において、
すでに 基本、練習、応用 の段階を
ふんだ指導がみてとれた。

(3) 帯単元「読書」と中学校3年間の「計
画案」

帯単元「読書」の目標と内容

帯単元「読書」(毎月2～3時間程度)は、
学習者の発達段階等をふまえて若干の異同
を見せつつ、ほぼ一貫した目標で展開された。
ここでは、最終年度である1970年度の目標
を次にあげる。

- 1 自己を開発し、自己をゆたかにする読
書。問題解決のため、問題発見のための
読書。休ませ、楽しみを得させる読書。
こういう意義を自覚させ、読書意欲を高
める。
- 2 読書する習慣を身につけさせる。
- 3 目的に応じて、適切な本を選んで、読
む態度を身につけさせる。
- 4 読書の方法・技術を身につけさせる。
- 5 読書に関する知識を整理し、ゆたかに
して、読書生活を確立させる。

これらは、1～3の目標によって、読書に
対する習慣や態度を醸成することを基盤に、
4の目標によって読書の方法・技術を習得さ
せ、5の目標によって読書に対する識見を高
め、読書生活の確立を目指したものになっ
ているとみることができる。

帯単元「読書」の内容は、大村自身の手
によって、次の八つの項目に整理されている。

- 1 読書について考える
- 2 本を探す・選ぶ

- 3 読書の技法
- 4 本の活用
- 5 感想を育てる
- 6 読書生活の記録
- 7 読書会
- 8 読書を誘う

これら八つの項目は、「読書生活の指導を、この八種類に分けて考えようとしたのではなくて、「そのときどきの目的で学習してきたものを、説明の重複を避けるために種類によってまとめた結果、このようになった」ものである。帯単元「読書」の実践によって、読書生活指導に必要な指導事項が、「1 読書について考える」から「8 読書を誘う」までの広がりを持ってとらえることができるようになったといえよう。

中学校3年間の「計画案」

先の八項目にわたる帯単元「読書」の内容は、以下のように中学校三年間の読書指導「計画案」にまとめられた。これは、大村が1970年1月に行った講演において、それまで行った帯単元「読書」の実践をもとに、構想・発表したものである。

(1年)

- 4月 読書生活の記録
- 5月 ノートのとり方
- 6月 あることから調べるために、適当な本を探す
- 7月 読む心を、新鮮に開くために(感想文の指導)
- 9月 百科事典を含め各種の本の活用
- 10月 批判的に読む準備として比べ読み
- 11月 読書論を読み、読書についての考えをゆたかにする
- 12月 本と本を結ぶ
- 1月 問題発見のために読む
- 2月 本を選ぶ
- 3月 本を読んで、何か実行したり試作したりする

(2年) 10月までは1年に同じ

- 11月 いろいろの読書法読み、読書についての考えを広くする
- 12月 本で本を読む
- 1月 読書会のいろいろの進め方を学ぶ(A型実習)
- 2月 読書会のいろいろの進め方を学ぶ(B型実習)
- 3月 読書会のいろいろの進め方を学ぶ(C型実習)

(3年) 9月までは1・2年に同じ

- 10月 批判的に読む
- 11月 このごろの読書論(読書週間にちなみ、各紙に読書に関する文章が多く出るので、それを集めて)を読む
- 12月 本で本を読む
- 1月 問題発見のために読む
- 2月 読書について考える

3月 読書について考える

大村は、「読書」に関する「基礎的な能力、きたえなければならない技能」を「3年間、資料の種類を変え、程度を上げ、場面の角度を変えてくり返し」てみようと考えたと述べている。各月の学習指導のねらいは、学年の特色を出した3学期をのぞいてほぼ共通しており、3年間を通して「読書」に関する「基礎的な能力、きたえなければならない技能」がくり返し学習されるものとなっている。各月の学習指導は、さらにその内容から次の五つに分けて考えることができよう。五つの項目と各月の学習指導とをあわせて掲げると次のようになる。

- 1 読書生活の記録(4月)
- 2 読書の方法や技術(5、6、9、12、2月〔1年のみ〕)
- 3 感想を育てる(7月)
- 4 読書会(1~3月〔2年のみ〕)
- 5 読書に関する識見を高める(10、11月、1月〔1、3年のみ〕、2月〔3年のみ〕、3月〔1、3年のみ〕)

これらは、「1 読書生活の記録」によって、自らの読書生活に自覚的な目を向け、読書意欲を醸成させることを基盤に、「2 読書の方法や技術の習得」をさせ、「3 感想を育てる」ことを行い、「4 読書会」や「5 読書に関する識見を高める」によって、読書に対する識見を高め、読書生活の確立を目指したものになっているとみることができる。

大村は、読書生活指導で必要とされる指導事項を、帯単元「読書」という取り立て指導を通して明らかにしていったと考えられる。この内容は、上述の通り、中学校3年間を見通した読書生活指導の「計画案」につながるとみられ、現代の読書指導カリキュラムの構想・実践に多くの示唆を与えるものとして受けとめることができよう。

なお、今回取り上げた「読書の方法や技術の習得」は、この後、単元的展開の学習指導のなかで、より必然性をもって扱われるようになったとみることができる。今後の課題として、読書指導カリキュラムの構想に役立たい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

平瀬 正賢、大村はま国語教室における読書生活指導の研究 帯単元「読書」を中心に、月刊国語教育研究、査読無、512巻、2014、pp.50-57

平瀬 正賢、年間カリキュラムに基づく学習指導の展開、月刊国語教育研究、査読無、510巻、2014、pp.4-5

平瀬 正賢、大村はま国語教室におけるカリキュラムの研究 1972~1974年度

「国語学習記録」の目次作りを中心に、
国語と教育、査読無、38号、2013、
pp.112-126
平瀬 正賢、「書くこと」を育てる朱筆の
視点と方法、月刊国語教育研究、査読無、
482巻、2012、pp.32-35

〔学会発表〕(計1件)

平瀬 正賢、大村はま国語教室における
読書生活指導の研究 批判的に読む学習
指導を中心に、長崎大学国語国文学会、
2013年12月7日、長崎大学(長崎県長
崎市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

平瀬 正賢(HIRASE, Masatake)

長崎大学・教育学部・准教授

研究者番号：00452855